

## 常德寺所蔵「黄檗版大蔵経」の調査・修復・整理

指導教員：金沢大学文学部比較文化研究室 教授 森 雅秀

参加学生：張 雅静・寺田展子・倉下ゆい・大平美佳子・菊妻亮太・北さよこ・藤野大輔・松本伊久也  
牧村真奈・川崎真夕・兼村奈穂子・川名 俊・北原佳希・西 諒・宮下和幸・奥田直文  
木越秀子・土田哲也・金田めぐみ・高木佐知子

### 1. 調査研究成果要約

震災によって散乱した常德寺所蔵の江戸時代の経典「黄檗版大蔵経」を調査・修復し、寺院の所蔵する文献や文書や寄進札の調査・整理を行った。経典や文献には、経典を収集した15代住職・得住や、その後継者・玄寧による注釈などの書き込みが見つかり、手沢本として唯一無二の価値があることがわかった。また8月3日には、地域や檀家の方々に集まって頂き、調査・修復の趣旨や活動内容についての現地説明会を行った。

### 2. 調査の目的

2007年3月25日に発生した能登半島地震で、石川県羽咋郡鹿頭（旧・富来町）の浄土真宗大谷派の寺院常德寺の経蔵が甚大な被害を受けた。寺院の経蔵には、江戸後期から明治初期にかけて活躍した得住の収集した黄檗版大蔵経が残されている。得住は加賀出身の浄土真宗大谷派の学僧で、宗門の学僧としては最高位である「講師」の学職を務めた人物である。黄檗版大蔵経は、経蔵の中心に設置された輪蔵に全巻が納められていたが、震災によって輪蔵が破損し、経典が経蔵内に散乱した状態となった。このままの状態では貴重な文化遺産を失うことになりかねず、早急な処置が必要とされる。このため、震災の影響で散乱した常德寺経蔵内の黄檗版大蔵経、その他の蔵書、寄進札や文書の調査・修復・整理を行い、劣化状況を把握するとともに、資料の保存と今後講ずべき対策を明らかにする目的で行ったのが本調査である。

黄檗版大蔵経、蔵書については、欠本の有無を確認するとともに、劣化や震災における被害状況を調べ、現物保存のための対策に結び付ける。同時に、糊付け・乾燥・埃払いなどの処置を行い、震災以前の状態への復元をめざす。また、黄檗版大蔵経、蔵書にみられる書き込みの調査や、寄進札や文書の写真の撮影と転写、蔵書の整理を行い、将来的に資料の内容や意義を調査する際の予備調査とする。



常德寺



経典が収められていた経蔵

### 3. 調査研究の内容

#### 3-1 経緯と調査期間

調査は、予備調査、本調査に分けて進められた。まず、5月2日に文学部教授の島岩、平瀬直樹、森雅秀が常德寺を訪れ、ご住職と仏教研究者の高畑崇導氏とともに経蔵内の様子を確認し、大蔵経やその他の文献の概数調査を行った。その後、6月10日に予備調査をもとに最終的な調査計画を練り上げた。7月11日、『北国新聞』にて調査・修復についての報道があった。7月17日には、金沢大学文学部にて全体打ち合わせを行い、高畑氏に常德寺の歴史についてお話いただき、本調査に備えた。

第一回本調査は8月2～4日の計3日間実施した。まず、8月2日の午前中に、常德寺檀家総代・世話役3名と金沢大学教員が懇談し、調査の趣旨や活動内容についての説明を行なった。さらに同日午後3時から志賀町役場富来サービスセンターにて志賀町教育委員会委員長と高畑氏、森が面会し、同様の説明を行なった。また、8月3日には常德寺の檀家の方々に集まっていただき、黄檗版や得住についてのレクチャーを交えた現地説明会を実施した。

調査・修復の作業は、8月2日の午後から開始し、比較文化・日本史・日本文学を専攻する学生14名が黄檗版大蔵経の修復、蔵書や寄進札の調査にあたった。作業は、(1)黄檗版大蔵経の修復、(2)寄進札の写真撮影・転写、(3)経蔵内のその他の蔵書の調査・整理の三つに分担して行った。さらに、11月3日に第二回調査を実施した。

#### 3-2 調査対象と範囲

常德寺所蔵の黄檗版大蔵経、蔵書、寄進札を調査対象とする。

黄檗版大蔵経は、禅宗の一派黄檗宗の僧・鉄眼によって1678(延宝6)年に開版された大蔵経である。常德寺所蔵の黄檗版大蔵経は、加賀橋立の廻船問屋五代目久保彦兵衛からの寄進をもとに、得住が1868年2月までに全巻を揃えたものであり、経蔵の中心に設置されている輪蔵に納められていた。



経蔵入口



支柱を残して破損した輪蔵と大蔵経



輪蔵の周囲にある蔵書

輪蔵とは、大蔵経を収納するための八角柱形の回転式書架のことである。常德寺の所有する輪蔵は3、4メートルほどの高さがあり、角の一面に備えられた五段の棚には277帙2095冊揃った黄檗版大蔵経が9帙ずつ収められていたが、震災により輪蔵の一部が破損し、大蔵経が散乱した状態となった。黄檗版大蔵経は経蔵から運び出し、常德寺本堂内の八つの棚に仮安置し、帙ごとに1～277の通し番号を割り当てて管理のうえ、修復作業を行うことにした。

また経蔵内には、入り口を除く3つの壁面に沿って、得住が収集したと思われるさまざまな分野の文献が詰まった文箱が並べられていた。これら文献は文箱ごとにナンバリングし、調査のために搬出を行なった後も現状に復することができるような措置を講じた。今回の調査では3日間という時間的な制約のため、文献全体についての確認作業は行わず、主要なもののデータ採取を行なうことにした。

このほか、経蔵外には約 200 枚の寄進札が保存されており、その年代は江戸後期から明治時代初期に及ぶ。これらは本来本堂などに掲げるものであるが、昭和戦前期までの古いものは外されており、今日まで保存されていたものである。今回は全ての寄進札について調査を行なうことにした。

#### 4. 調査研究の成果

##### 4-1 黄檗版大蔵経の修復

黄檗版大蔵経については、(1) 帙の修復、(2) 欠本の確認、(3) ハケでの全体の掃除、(4) 経の修復、の四点の修復作業を行なった。

(1) 帙の修復...帙は埃汚れのほかに、虫害や湿気による損傷がみられた。湿気被害のひどいものは、帙外側の布の退色・破れ、内側の紙の剥がれ、内部の木板の損壊・喪失がみられたが、可能なかぎり修復・復元を試みた。帙表紙の左上には帙題が貼られており、一部、痛みによる題箋の喪失がみられた。剥がれた題箋は接着した。

(2) 欠本の確認...帙には 2~8 冊ほどの和装本の經典が収納されており、2095 冊の經典にはそれぞれ千字文がふられ、經典の題箋と、經典本体の右上部にそれぞれ墨書きされている。また帙の内側にも、収納してある經典に対応する千字文が墨書きされている。帙、經典本体の千字文と見比べながら、欠本がないか確かめた。

(3) ハケでの全体の掃除...帙、經典ともに埃がひどく、ハケで汚れを払った。

(4) 経の修復...經典は、綴じ糸の切れ、虫食い、虫の糞尿や黴による表紙や丁の固着がみられた。今回の作業では、はげしい固着の除去、剥がれた題箋の接着、見返しと表紙の剥がれの接着を行った。見返しの修復方法は、表紙裏の和紙の折り背側に 5~10 ミリ程度糊付けし、表紙を閉じて接合するもので、裏表紙も同様の作業を行った。糊付け後はできるだけ乾燥させるよう務めた。

三日間の作業の結果、黄檗版大蔵経全体の約七割である 201 帙の修復を終えた。さらに、11 月 3 日に二次調査を実施し、未修復の 76 帙の作業を行い、277 帙すべての修復を完了した。調査の結果、欠本はみられず、大蔵経全体が完備していることが明らかになったが、ほとんどの經典に虫害・湿気や黴による傷みがみられた。帙の損傷が著しいものについては特に黴による劣化が認められた。



見返しと表紙の接着



ハケでの清掃



帙の修復

#### 4-2 文献の調査・整理

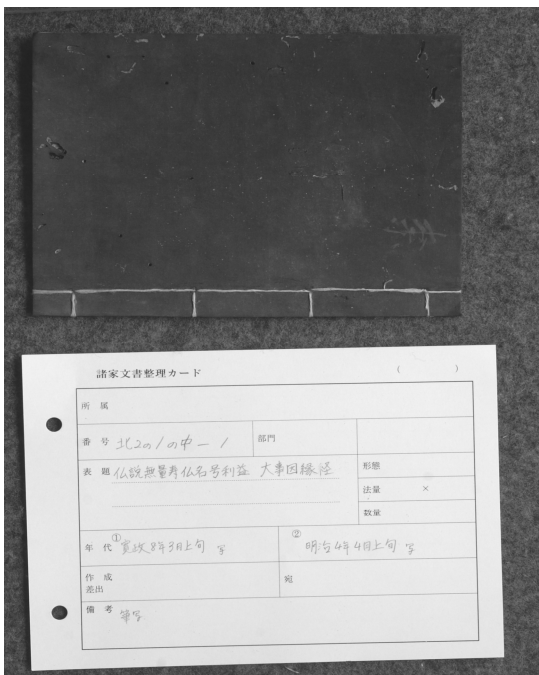
経蔵内の大蔵経以外の文献は、約 2400 冊の蔵書のうち主要なものについて「表題」・「数量」・「年代」・「作成」( 版本の版元 )・「備考」( 奥書、記入された年月日、印など ) を文書整理カードに記録し、特徴的な内容を持つものは写真撮影した。また、劣化損傷がみられるものについては、修復処置を行った。

文献は、経蔵内の 84 箱の文箱に収められており、さらに平積みされた冊子が 13 束あった。文箱に入ったものの多くは仏典、ついで国文学関係の版本であり、シリーズごとにまとめられていた。平積みされたものの中には孤立した興味深い典籍が混じっていたため、先にすべてを調査し、本箱のものは今年度の調査で半分まで終了した。現段階で判明している典籍類の内容傾向を以下に記しておきたい。

得住は本山で講義を行っているが、真宗教学関係のみならず南都仏教の教学を熱心に学んでいるのが特筆され、瑜伽唯識、華嚴経学に関わるものが多数見られる。次の玄寧期になると『南蛮寺興廢記』(キリスト教批判書) や『内外十六題記』(建白書類の写し) のように、国家・社会の激変に対する宗門側の対応を反映した記録が見られる。また、真宗とはかけ離れた密教の事相に関する『大威徳明王念誦供養法』や『印図 巻第一 十八道』というものがあり、後者の奥書の中には中世史料となるような 1510 年(永正 7)の白山関係の記述がある。これらは近隣の密教行者から、たとえば廃仏毀釈など、何らかの特別な事情のために持ち込まれたのではないだろうかと思われる。

#### 4-3 寄進札の調査

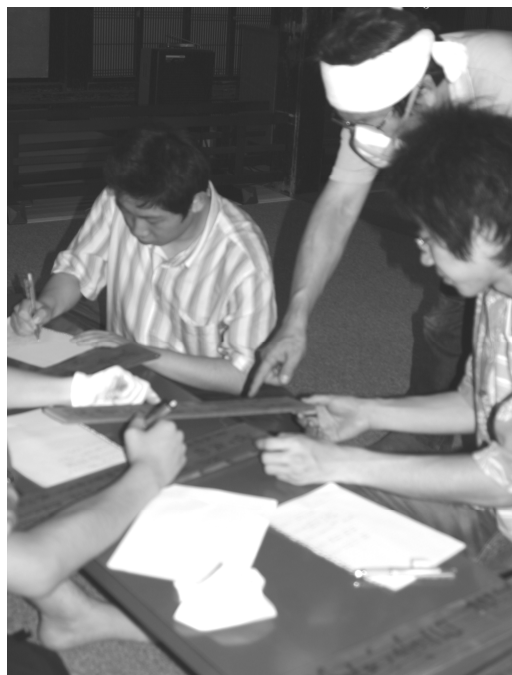
寄進札については、すべて写真撮影したうえで、「年紀」・「寄進物」を調査カードに記入していった。調査により、黄檗版大蔵経購入のための寄進が記された札や、金額は不明であるが 57 年(安政 4)に、御経堂輪蔵建立の旨が記された札が確認された。特に 1841 年(天保 12)以来、得住を支援し続けた加賀橋立浦の久保氏の寄進が目立ち、久保氏は 42 年(天保 13)や 54 年(嘉永 7)など、得住が本山で出世するたびに祝儀を寄せている。そのほか、常德寺の属する鹿頭をはじめ、酒見、笹波、大泊といった近隣の村の住人が篤志を寄進していたことがわかった。県外では北は北海道、東は東京、西は大坂に寄進者が見られる。女性名義の寄進も多く、村の女性門徒や常德寺の坊守も見え、女性の真宗信仰に関する史料としても興味深い。



文書整理カード



寄進札



寄進札の転写

### 4-3 説明会の実施

8月3日の12時30分～13時30分まで、常德寺の檀家の方々や地域の人々に集まって頂き、調査の趣旨や活動内容についての説明会を実施した。森が全体の概要と大蔵経について、平瀬が黄檗版大蔵経の歴史的意義について、高畑氏が常德寺と得住について、それぞれ短いレクチャーを行った。説明会の会場となった常得寺本堂には40名ほどの参加者が駆けつけ、会場からは熱心な質問が相次いだ。この説明会には志賀町文化財保護審議会の谷口信男委員も出席された。



## 5. 調査研究に基づく提言および自己評価

今回の修復・調査の成果として、現在、寄進札のデータベースの構築、さらに蔵書のリスト作成を行っている。これらの完成により、さらなる研究の発展を促すことができるであろう。また本調査は、常德寺のみならず同様の歴史的文献を所蔵する機関・施設にとって一つのモデルケースとして、蔵書の調査・修復および保存対策に資すると信じている。

### 5-1 黄檗版大蔵経、蔵書の保存

黄檗版大蔵経、蔵書ともに、虫害・黴や湿気による劣化がみられたが、大蔵経は帙に収納されていたことや、震災まで輪蔵という保存環境にあったこともあり比較的状态がよく、欠本もみられなかった。さらに、大蔵経や蔵書には得住本人が書き込んだとみられる注釈が数多く見つかった。これら資料は、現在に至るまでまとめて伝存している点、江戸時代の学増・得住の手沢本という点からも史料的高いものとして貴重である。そのため、修復において現状への介入は最小限にとどめたが、劣化の著しい資料については、さらなる修復措置や保存環境の整備が望まれる。また、帙の破損した黄檗版大蔵経や、文字の薄れ・固着・閉じの破壊・破れがみられる文献については、将来的に脱酸性化処置、紙力強化処置、再製本、他メディアへの媒体変換などの処置を検討する必要があると思われる。



得住による朱書きの書き込みが見られる蔵書

### 5-2 「知の空間」としての利用

今回修復・調査を行なった常德寺経蔵内の黄檗版大蔵経や文献は、主として15代住職得住と16代玄寧の学問研鑽に使用されたものであり、この経蔵は彼らの生きた幕末から明治初期の「知の空間」ということができよう。また、寄進札に地元門徒の名が多くみられるように、経蔵内に残る大蔵経や文献は寺院や寺院をとりまく地域の歴史を伝える貴重な史料であるとともに、地元の人々によって支えられてきた、地域の文化財であるといえる。

文化財は、単に保存するだけでは意味がない。こうした文化遺産を保存・維持してゆくためには、人々が地域共有の文化財として広く認識したうえで、長期的な保存活動を進めてゆく必要がある。そのためには、これら史料を死蔵させてしまうことなく、展示、あるいは生涯学習のための開放講座、総合学習の地域研究での利用などを通して公開・研究を進め、今日まで伝存されてきた「知の空間」を活かし、伝えてゆく必要があるであろう。